

エピソードの概要	本件各著作物	本件映画	原告の主張	被告の主張
1 暴行の状況	<p>[本件著作物1 12頁6行目ないし20頁3行目]</p> <p>T字路を左に曲がろうとした瞬間、 「ねえ！」 と車の運転席から男に呼び止められたのだ。 「道教えて」 と、道を聞かれた。 私は普段からよく道を聞かれる。しかしその日は、泣いていたこともあったし、軽々しい呼び止め方が気に入らなかったが、自転車を止めてしまった手前そうもいかず、とりあえず適当に答えることにした。 「〇〇駅ってどっちですか？」 「あっち」 「え？ わかんないよ。悪いけど、地図で教えて」 今の教え方でわかるわけがないか……と思いながら、自転車を降り、男が広げていた地図を、運転席の窓から覗き込んだ。私より年下に見える、いかにも軽そうな瘦せ型の茶髪の男だった。 「あれ？ 泣いてるの？」 男が尋ねる。無視した。 「どうしたの？ なんがあったの？」 「いいえ。なんでも。〇〇駅は……いまここだから、あそこの道を……」 と、通りを指差そうと振り返ると、背後に大きな男がいた。自転車のハンドルに掛けていたはずの、私のカバンを手にしている。 『新手のひったくり？』 見ると、車の後部ドアが開いていた。茶髪の男と大男がグルであるど、とっさに思った。 カバンの中には、仕事で翌日提出しなければならない書類が入っている。失くしたりしたら信用問題にかかわる。 「ちよつと！！！！」 その大男を追いかけた。そいつはカバンを持ったまま、四輪駆動車の後部座席に乗り込んだ。私は、カバンを取り返すため、手を伸ばした。そして男に手を掴まれ、車内に引っ張り込まれた。 一瞬だった。どんなふうにも、なんて覚えていない。 いつのまにか、後部座席に押し倒され横になった私は、タオルのようなもので目隠しされ、顔全体を押さえられていた。男が私のお腹の上に乗っている。息もままならなくて、もがいた。 「静かにしろよ！ 怪我したいのか！」 耳元で、「カタカタカタ」という音がした。それがカッターの刃を出し入れする音だと、すぐに解った。 『殺されるの？ 死にたくない』 そんなことしか頭に浮かばなかった。 大声なんて、出ない。出せない。出し方を忘れてしまったように。暴れようと思って力を入れても、身体が動かない。カッターに触れるのが怖かったのもある。押さえられて動けなかったこともある。でも、不思議なことに、自分の身体なのに、どう動いていいのかも分からず、金縛りみたいに動けなくなっていた。 うるさいくらいの音量で音楽がかかっている。 胸を触られ、全身に鳥肌が立った。 ズボンのベルトが切られるのが分かった。この後、一瞬の記憶が湧いている。シャツのボタンを弾かれたのは、まったく覚えていない。ズボンと下着が下ろされたことも、暴れたのか、硬直していたのか、それすらも。 解放されるまでの記憶はすべて聴覚のみである。私は何をしていたんだろう。無抵抗だったのか……。身体の記憶がない。</p> <p>「うわ！ マジかよ！」 「おい！ こいつ生理だぞ！」 「はか！（車）汚れんぞろ！ やめろ！」 二人の男が言い合いをしている。夢の中のような聞こえ方だった。そうだ。私は生理中だった。ほんの少しだけ、期待した。夢のかな、生理なら解放してもらえるんじゃないかって。 その期待をうち消すように、 「関係ねえ。もったいねーし」 という声を聞いた。 そして、奴が入ってきた。 このとき、一度だけ、大声で、叫んだ（ような気がする）。出たか出ないかわからないその声と一緒に、それまでの二十四年間を過ごしてきた私が、消えた。学生時代の勉強や、部活動、友達つき合い、すべてが洗い流されたように感じた。「水の泡」「全否定」。そんな気がした。 そして、抵抗する気力も、声も、感情も消えた。歯を食いしばって「やり過ぎず」という言葉がちょうどいいかもしれない。思考能力がゼロになって、頭の中が真っ白になった。 「抵抗できたはず」「大声を出して逃げることができたはず」 そんなことは、机上の空論。理想論。できない。自分の身体なのにできない。 医学的・心理学的にどうとかはわからないが、横断歩道を渡っているときに凄く速さで自動車走ってきたら、自動車に気づいた瞬間、「はっ」とそこで立ち止まってしまうのではないかな。そのまま歩き続けられればぶつからないで済むものを、まるで自動車とぶつかるのを待っているように。「足が嫌んで」というより、きっと足を動かすことさえ思いつかないだろう。そんな感覚だ。</p> <p>「どうだ？」 足のほうから声が出た。そいつが何をしているのかは、考えたくもなかったが、何かを入られ、いじられているのが解る。 「どこか？」 「感じるか？」 「いいだろ？」 男は私にしきりに何度も問いかけてきたが、答える気も聞く気もなく、騒音のような音楽の中に声が消えていった。 そんななか、ずっと『生き残りたい』と祈っている自分がいた。これが本能なのか。『もうどうにでもなれ』『生きていく価値がない』という気持ちが芽生えてくるのに反して、私は『死にたくない』『殺さないで』と願い、いままこうして生きている。 『入れられているのも、触られているのも、私ではない。何かの間違いだ』 真っ暗な、大きな音が聞こえる中で身体が硬直している。感覚も感情も、何もなかった。痛みだけを、うっすらと覚えている。そして『早く終われ』と思う反面、 『終わったら、私はどうなるの？』 という恐怖や不安が湧き上がってきた。無事に解放される保証はない。一瞬一瞬に常に私は二つの相反する願いと不安を感じていた。 『早く終わって……。放して！！！！』 「いくぞ……！」 男が射精を終えた。うなり声をあげている男に対して、 『こいつハカだ』 と、思った。 二人の男の会話が聞こえた。 「お前は？」 「俺はいい！ 車が汚れんぞろ！」 運転席にいた男は、生理の私を、嫌がったようだった。私は改めて、殺されるのではないかと不安と恐怖に襲われた。 『死にたくない』 「ほら降りろよ！」と車のドアを開けられ、外に出たとき、私はちゃんと服を着ていた。男の行為が終わった後、私は驚くほど冷静に服を着た。目隠しもはずされていた（はずした？）。私が車の中で見ていたのは、自分の膝と、カバンだけだった。 私は道に投げられたカバンを拾い上げ、それを抱えて歩道に立っていた。車はいつのまにか、いなくなっていた。</p> <p>[本件著作物2 11頁11行目ないし15頁10行目]</p> <p>公園の先のT字路を左へ曲がったとき、 「ねえ！」 止まっていた四輪駆動車の中から、男の声がして呼び止められました。とっさに自転車を停めた私に、男はこう続けた。 「駅はどっち？」 薄暗い公園沿いの道。髪を茶色に染めた見知らぬ男。 そのときの私は、まさか自分が危険な目にあうなどとは思いません、泣いている顔、見られたくないな」と、そんなことを考えていました。 男は、運転席で地図を広げて待っています。 仕方なく自転車から降りて運転席に近づき、地図を指差しながら説明しました。道の方向を指差そうと振り返ったとき、そこにもうひとり、大きな男が立っていたのでした。 自転車のハンドルにかけていたはずの私のバッグを手にしています。 「ひったくり？」 そう思ったとたん、大男が動き、四輪駆動車の後部座席に乗り込みました。 かばんを取り戻そうと伸ばした私の手が、大男に力強くつかまれ――。 次の瞬間、私は車内に引きずり込まれていました。 後部座席に押し倒され、タオルのようなもので目隠しをされ、顔全体を押さえられ、男が私のお腹の上に乗っている。</p>	<p>[6:47～]</p> <p>武田(声)「あの、すみません」 玲奈が顔を上げると、窓にスモークを張った黒いワゴンの助手席から、さわやかな微笑を浮かべて、赤いキャップをかぶった武田誠一(二十一歳)が顔を出している。 玲奈「？」 武田「ちよつと道に迷っちゃって、教えていただけませんか？」 玲奈「はい」 武田は、地図帳を広げて、その一部を指さしている。助手席から降りてこようとはしない。 玲奈は自転車でスタンドをかけると、助手席のほうに近づいていく。 武田「この通りは抜けたいんだけど」 玲奈が地図を見ながら道を説明しているところに突然、後部座席のスライド式のドアが開く。乗っていた阿部(二十一歳)が一瞬のうちに玲奈を車内へと引きずりこみ、武田が素早く助手席から降りて後部座席に乗り込みドアを閉める。 あたりには、誰もいない。</p> <p><u>路上(夜)</u></p> <p>路上駐車したワゴンの内部は、窓にスモークが貼られているため、外側からわからない。 誰も異変に気づかない。</p> <p><u>別の路上(夜)</u></p> <p>走ってきたワゴンが一旦停止すると、スライド式のドアが開いて、まるで荷物のように、玲奈を地面に落とすように、ワゴンは走り去っていく。</p> <p>[9:40～]</p> <p><u>玲奈の回想・路上駐車したワゴン(車内)</u></p> <p>武田が、抵抗する玲奈の両腕を押さえつけている。阿部がべつと血の付着した二本の指をこちらに見せる。 阿部「(武田に)こいつ生理中だわ。見ろ見ろ見ろって、おい。どうするよ？ 最悪だ」 阿部が指に付いた血を玲奈のシャツで拭く。 武田「(阿部に)なあ別の女にしない？ だってシート汚しちゃうとおまえの兄貴に怒られるじゃん」 玲奈が上半身を起こして車から逃げようとするが、シートに引き倒される。 なおも抵抗する玲奈の首元に武田がナイフを突きつける。 武田「(玲奈に)ほらほらほら危ないよ！ ねえ、おまえ殺されたいの？ だったらそういって、絶対誰にも気づかれないところに埋めてあげるから。ね！ じっとしてろ。」 玲奈の抵抗が止まる。ナイフから目をそらす。 阿部がズボンと下着を下す。 阿部「もういや、こいつで」 阿部の下半身が、玲奈の中に入っていく。</p>	<p>①主人公の女性(本件各著作物では原告)が、夜間の一人の帰り道に、停車中の車の助手席に座った若い男から道を尋ねられること ②道を教えようとしたら仲間の男が現れて車に連れ込まれ、うちの1人に車内で暴行されたこと ③主人公が生理中であったこと ④刃物で脅されて恐怖で抵抗できなかったこと ⑤路上駐車している車の中でのことにもかかわらず、周囲の誰にも気付かれないこと ⑥暴行後に主人公が車から降ろされ、車が走り去ったことが共通している。 これらの事実は、⑦暴行の際に原告が感じた恐怖と絶望、⑧原告がこれから先に待ち受ける苦しみの中に一人放り出された孤独感を表現している。</p>	<p>原告が主張する①ないし⑥は、何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものではない。 また、①ないし⑥の客観的「事実」自体をもって、⑦及び⑧の原告の思想や感情を創作的に「表現」したものと考えすることはできない。 なお、原告が強姦被害にあった際の状況について、本件各著作物においては、被害者である原告の視点で、時系列に沿って、当時の原告の内心と共に記載されているのに対し、本件映画では、第三者の視点で、当時の状況が淡々と描写されているのであって、その表現は異なる。</p>

エピソードの概要	本件各著作物	本件映画	原告の主張	被告の主張
	<p>耳のかたわらで鳴っている、カタカタカタという音。カッターの刃を出し入れする音だとすぐにわかりました。</p> <p>「怪我したくなければ、静かにしている！」</p> <p>男の怒鳴り声。耳をつんざくような大音量の音楽。</p> <p>怖かった。</p> <p>“まさか、ここで殺されるの？”</p> <p>ひたすら怖かった。</p> <p>全身に鳥肌が立つ。悲鳴も出ない。</p> <p>“生きていたい！”</p> <p>ずっとそう思っていたことは覚えています。</p> <p>でも、身体に力が入らない。抵抗したくても、暴れようとしたくても、怖くて怖くて、金縛りにあったように身動きができません。</p> <p>ベルトを切られ、シャツのボタンがはじかれ、パンツと下着を下ろされ……。それは後に自分の服装を見てわかったことで、いつそうされたかの記憶は、ほとんどないのです。</p> <p>そして、男の性器が入ってきました。</p> <p>「どうだ？」</p> <p>「感じるか？」</p> <p>頭の中がただ真っ白で、抵抗する気力も、声も、感情も消えた私の耳元で聞こえる声。</p> <p>私は、</p> <p>“入れられているのも、触られているのも、私ではない。絶対、違う！”</p> <p>必死にそう思い込もうとしていました。</p> <p>そして、“終わったら、私は殺されるの？”という恐怖。</p> <p>一方で、射精する瞬間に上がった男のうなり声を聞きながら、</p> <p>“こいつ、バカだ”</p> <p>強烈にそう思ったことを覚えています。</p> <p>その日、私は生理中で、もうひとりの男は、車が汚れるのを嫌ったようでした。</p> <p>すでに目隠しのタオルははずされていますが、私は男の顔を見ることができず、しかし驚くほど冷静に、衣服を身に着けました。</p> <p>どのくらいの時間が経っていたのか、正確なことはわかりません。</p> <p>車のドアが開けられ、外に解放されたときに、私がまず感じたことは、</p> <p>“生きている”</p> <p>ということでした。</p> <p>四輪駆動車は、いつの間にかいなくなっていました。</p>			
2	<p>[本件著作物1 21頁2行目ないし22頁3行目]</p> <p>二十メートルほど先にある、公園内の公衆トイレに向かっていた。</p> <p>車を降りてからずっと、夢じゃないかと思っていた。だって、周りは何も変わっていない。自分の身に何が起こったのか確かめたかった。</p> <p>トイレで下着を下ろして、愕然とした。生理だったのは良かったのか悪かったのか……。下半身からお腹にかけて、血だらけだった。シャツにもついてる。胸にも血がついていた。</p> <p>『胸、触られたんだ……』</p> <p>ブラジャーのホックも一つ壊れていた。夢じゃない。生理用ナプキンを便器にたたきつけた。そして、持っていたポケットティッシュを水で濡らし、身体中を拭いた。</p> <p>臭くて汚いトイレだ。誰かのいたずらか、設置されていたトイレトペーパーが大量に便器に詰められている。私は、何度も水を流した。便器から水が溢れ出しそうになり、隣の個室に移った。そこで、悔しさと無力感が込み上げてきて、泣いた。</p> <p>惨めだった。小さなポケットティッシュで身体を拭いている自分を、とても惨めに感じた。</p> <p>[本件著作物2 15頁11行目ないし16頁9行目]</p> <p>私は道に落ちていたバッグを拾い上げ、自転車のハンドルにかけて歩き出しました。</p> <p>目を上げると、少し離れたところにあるコンビニの明かり。出入りする人々。その前を行き交う車。</p> <p>何も変わらない日常の風景がそこにありました。</p> <p>何も変わっていない周囲の景色を見ながら、だから私にも何も起きていない、今は夢だったんだ……。そんなふうにはぼんやりと思っていた私を現実に戻したのは、公園の汚いトイレに入って、下着を下ろしたときのことです。</p> <p>下半身からお腹にかけてが、血だらけでした。</p> <p>胸にも、血がついています。</p> <p>壊されたブラジャーのホックを見ながら、「触られたんだ……」と。</p> <p>持っていたポケットティッシュを水で濡らし、全身を拭きながら、悔しさと無力感が込み上げてきて、自分のみじめで仕方ありませんでした。</p> <p>私は震えていました。</p>	<p>[8:36～]</p> <p><u>公園脇の歩道(夜)</u></p> <p>玲奈は足を引きずって歩いていく。誰もいない。公園に入り、公衆トイレの女性用へと入っていく。</p> <p><u>公園・公衆トイレ(内)・洗面台(前)(夜)</u></p> <p>玲奈が下を向いて手を洗っている。少しずつ顔を上げて鏡を見る。その顔は歪んでいる。</p> <p>もがくような玲奈の声 阿部(声)「マジで？」</p> <p>[10:39～]</p> <p><u>公園・公衆トイレ(内)・洗面台(前)(夜)</u></p> <p>玲奈が鏡に向かって叫びを上げる。</p>	<p>①主人公が傷付いた体で公園の公衆トイレに入ったこと</p> <p>②そこで血などの汚れを落としたこと</p> <p>③自分の姿や状態に気付いて愕然としたこと</p> <p>これらの事実は、⑦事件直後の原告がとにかく誰にも見られないところ身を隠したかったこと、⑧原告は暴行されたという現実には否応なく目を向けさせられたこと、⑨それによって受けた衝撃を表現している。</p>	<p>原告が主張する①ないし③は、何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものではない。</p> <p>また、⑦及び⑧は事実であって、思想または表現ではないし、上記①ないし③の客観的「事実」自体をもって、原告の思想または感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。</p> <p>なお、原告が公園のトイレに入って自分の状態をあらためて知った状況について、本件各著作物においては、原告の視点で、また時系列に従って、当時の原告の内心の状況を中心に記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の視点で、その状況が淡々と描写されており、事件の描き方も時系列に沿っていないものであって、表現方法もまた異なる。</p>

エピソードの概要	本件各著作物	本件映画	原告の主張	被告の主張
3 (元)恋人が公園に駆け付けた	<p>〔本件著作物1 25頁11行目ないし27頁9行目〕</p> <p>結局、「Dちゃん」に電話をしてみました。 「もしもし？」 電話ごしの彼の声に、涙が溢れ出た。いつもと違う私の様子に気づいた彼は、 「どうしたんだ？ 絶対に動くな！ そこにいる！」 と、私に命じた。 しかし、彼を待つ間も、やはりじっとはしていられなかった。誰かに来てほしいような、見られたくないような、別れた人にこんな情けない姿を見られる恥ずかしさ、関係ない人を巻き込んでいいのかという迷いが加わり、また暗間を求めて、歩いていた。 公衆トイレにも、もう一度行った。 夢であってほしい、夢なんじゃないかという思いが、そうさせた。 一時間ほど経っただろうか。携帯電話が鳴った。 「どこにいるんだ？」 「公園の周りをうろろして……」 「ハカ！ 早く見えるところに来い！ コンビニの前に来られるか？」 「うん……」 彼が来た。 泣いている私と、私の服を見て、彼は、 「何かされたのか!？」 と、驚いた顔で言った。何をされたのか、思い出したくない。 「……されたのか？」 私は頷くのが精一杯だった。 「くそっ!!」 彼のバイク用のヘルメットが、道路にたたきつけられた。 「ごめんなさい」 私は謝り続けた。</p> <p>〔本件著作物2 16頁10行目ないし18頁12行目〕</p> <p>トイレから出ると、人に見られるのがいやで、明かりの届かない公園の植木の間の岩に座り、バッグを抱きしめて、震えを抑えていました。 帰ろうと思うのに、身体が動きません。 ひとり歩いていくことを思うと、怖くて仕方がないです。 車でものの5分のところには、両親と兄、弟が住む実家があります。でも、家族に話すことなどとてもできません。 近くに住んでいる友人もありますが、こんな姿を見せられない。 結局、私が助けを求めたのは、1週間前に別れたばかりの、Dちゃんでした。 後で話しますが、その日、Dちゃんは会社の仲間たちとの飲み会で、地下のお店に入っていたそうで、ようやく電話が通じたのは、最初に留守電を入れてからかなり時間が経ってからでした。 私の記憶ですぐに電話で話せたと思っていたのです。ところが、後にDちゃんから聞いたところでは、私は何通ものメールを送っていたそうです。 「死にたい」 と一言だけ書いて、 とにかく、ようやく通じた電話で彼は、「そこにいろ、絶対に動くな」と、私に指示しました。 駆けつけてくれたDちゃんは、私の洋服を見て、 「何かされたのか？」 と尋ねました。 何も言えず、黙ったままの私に、 「されたのか？」 私がうなずくと、彼は乗ってきたバイクのヘルメットを、思い切り道路に叩きつけたのでした。 私は泣きじゃくりながら、何度も「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝り続けていました。 今思えば、私が悪いことをしたわけではない。にもかかわらず、元恋人を前にして、私はひたすら謝っていたのです。 すでにこのときから、私は自分が汚れてしまったと強烈に思っていたのだと思います。同時に、ついこの間まで付き合っていた彼を呼び出したことが申し訳なく、情けなく、「ごめんなさい」としか言えませんでした。</p>	<p>〔11:30～〕</p> <p><u>公園近く・路上(夜)</u></p> <p>健司が息を切らしながら走っていく。 公園の入口が視界に飛びこんでくる。</p> <p><u>公園(内)(夜)</u></p> <p>健司が息を切らして走ってくる。 玲奈が外灯の下でひとりぼつんとベンチに座っている。 健司は玲奈の前にたどりつく。 健司「息荒くどうした？……何？……これ」 玲奈のブラウスは破れており血が付着している。顔を泣きはらしている。 健司「何かされた？」 玲奈「……(うなずく)」 健司「誰？」 玲奈「……(首を振る)」 健司は道具を蹴り上げ、夜空に向かって声のかぎりに叫び声を上げ、地面に跳く。 健司「ああああああ!!! なんだああああああ!!!」 玲奈「(泣きじゃくって)ごめんなさい……ごめんなさい……」 健司が玲奈の頭を両手で包んで、額と額を合わせる。 健司「謝らないで、玲奈は謝らないでいいよ……」</p>	<p>①主人公が(元)恋人に助けを求めたこと ②公園に駆け付けた(元)恋人が主人公の様子に驚いて、誰かに何かされたのかと聞いたこと ③主人公はうなずくしかできなかったこと ④(元)恋人が、主人公が暴行されたことを知ってやり場のない怒りに震えたこと ⑤主人公は被害者であるにもかかわらず(元)恋人に「ごめんなさい」と謝り続けたこと ⑥被害者であるにもかかわらず強烈な罪悪感を植え付けられてしまったことを表現している。</p>	<p>①ないし⑤は、何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものではない。 また、④に関しては、本件映画においても、主人公が強姦されてしまったことを自分の責任と感じて婚約者に申し訳なく思っていることは読み取れるとしても、「強烈な罪悪感を植え付けられている」とまで言い得るのかは疑義が残る。 仮にそのようにいえるとしても、②及び④は「事実」であって思想又は感情ではないし、また、①ないし⑤の客観的「事実」自体が、原告の思想または感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。 なお、(元)恋人が公園に駆け付けた状況は、本件各著作物においては、原告の視点で、当時の原告の内心と共に記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の視点で、その状況が淡々と描写されているのであって、表現方法もまた異なる。</p>
4 事件の翌朝に(元)恋人が仕事を休ませようとするが、それを聞き入れずに出勤する	<p>〔本件著作物1 36頁3行目ないし13行目〕</p> <p>私は六時に起きて、仕事に行った。長時間泣いていたせいで目が腫れ、ひどく不細工な顔だった。彼も仕事だったので、朝、目覚ましついでに謝罪の電話を入れた。 「お前、仕事行くのか？ こんな日くらい休めよ……」 そんな返事が返ってきたが、仕事を休む理由が見つからない。 「こんなことで仕事を休んでいいの？ なんて言って休めばいいの？ ホントのことなんて言えないよ！」 「体調悪いつて言えばいいだろ？」 「なんで嘘つかなきゃいけないのよ！」 「じゃあホントのこと言うのか？ そんなことまで正直に言わなくていいだろ!？」</p> <p>〔本件著作物2 21頁7、8行目〕</p> <p>私は「少し、休め」と電話で言ってくれるDちゃんの心配をよそに、翌日も仕事に行きました。</p>	<p>〔12:44～〕</p> <p><u>玲奈のアパート・居室(朝)</u></p> <p>スーツを着た玲奈が鏡台に座って化粧をしている。 健司が床に座って鏡越しに玲奈を見ている。 健司「仕事…休めない？」 玲奈「……なんて言って休めばいいの？ 『ゆうべ強姦されから、今日はお休みします』っていったら、みんな同情してくれるの？」</p>	<p>①事件翌朝に(元)恋人が主人公に仕事を休むように勧めたこと ②それを主人公が拒んだことその際の「なんていつて休めばいいの?」という言葉(台詞) ③上記の何もなかったかのように振る舞おうとする行動は、原告が周囲に被害を悟られたくないと強く願っていたこと、④仕事を休むと事件に向き合うことになるのが堪えられなかったこと、 ⑤何もなかったと自分自身に言い聞かせなければ心が壊れてしまいそうな恐怖を感じていたことを表現している。</p>	<p>①及び②は、何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものではない。 また、①及び②の客観的「事実」自体をもって、⑦ないし⑧の原告の思想や感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。 なお、事件の翌朝に(元)恋人が仕事を休ませようとするが、それを聞き入れずに出勤した際の状況が、本件各著作物においては、原告の視点で、当時の原告の内心と共に記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の視点で、鏡越しにその状況が淡々と描写されているのであって、表現方法もまた異なる。</p>

エピソードの概要	本件各著作物	本件映画	原告の主張	被告の主張
5 シャワーで体を洗い続けることがあった	<p>[本件著作物1 58頁6行目ないし60頁10行目]</p> <p>蘇ってくる感情について、時間を追って少し書きたいと思う。正確に言えば、「感情」という表現は適切ではない。感覚とか反応、症状というほうが近いかもしれない。(中略)</p> <p>私の場合は毎月やってくる生理が引き金となり、……シャワーでずっと身体を洗っていることもあった。</p>	<p>[15:57～]</p> <p><u>玲奈のアパート・浴室(内)(早朝)</u></p> <p>シャワーの音が聞こえる。床に敷いた布団で寝ていた健司の目が覚める。ベッドに玲奈がいないのを見て浴室に行く。</p> <p>玲奈がシャワーを浴びながらヒステリックにスポンジで体を洗っている。 玲奈「落ちない…落ちない…！」 健司「ねえ、おまえシャワー何回目だよ？」 健司が寝巻のスウェットのまま浴室に入って玲奈が体をこするのをやめさせる。 玲奈「落ちない…！」 シャワーが二人の頭上から降りそぐ。 健司「大丈夫だよ、見せてみろって…きれいだよ……玲奈の体はきれいだよ……」 玲奈「……(首を振る)」</p>	<p>主人公がシャワーで体を洗い続けることがあったことが共通している。</p> <p>この事実は、②事件に対する恐怖や忌まわしき、④事件をなかったことにしたいという衝動や、⑤事件によって自分が汚れてしまったという感覚が深く根付いて拭い去れなかったこと、⑥それらが蘇ってきていたことを表現している。</p>	<p>主人公がシャワーで体を洗い続けることがあったことは客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものであるのではない。</p> <p>また、主人公がシャワーで体を洗い続けることがあったという客観的「事実」自体をもって、⑦ないし⑧の原告の思想や感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。</p> <p>なお、原告がシャワーで体を洗い続けることがあったという状況が、本件各著作物においては、原告の視点で、原告の内心と共に端的に記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の、または恋人の視点で、その状況が生々しく描写されているのであって、表現方法もまた異なる。</p>
6 恋人に過大な負担をかけて、遂には別れるに至った	<p>[本件著作物1 74頁5行目ないし最終行]</p> <p>一人で帰らなければならぬときは、「また襲われてもいいの？ 心配じゃないの？」と、脅迫じみた電話をして彼に迎えに来てもらったことが、何度もあった。</p> <p>別れ話を切り出されれば、 「逃げる気？ ずっと側にいてくれるって言ったじゃない！」 「あとき私が公園の周りを通ったのはあなたのせいよ！」 「結局そんな薄情な人間なんだ！」 という具合に彼をなじる始末。ひど過ぎる。そんな私の相手をするに疲れたのか、喧嘩をすると、彼の口からも、 「お前ホントは喜んでたんだろ。スリルがあって気持ちいいかと思ってたんだろ」 「お前みたいな汚れた女とつき合ってやってんだ。感謝しろ！」 という言葉が出るようになった。</p> <p>[本件著作物1 107頁9ないし11行目]</p> <p>「Dちゃん」に電話をしよう…。 「頼むから、もう俺のことは忘れて、幸せになってくれ。」 彼は言った。</p> <p>[本件著作物2 26頁10行目ないし28頁1行目]</p> <p>当時の私は、 「私が事件にあったことを知っている人は、私を護らなければならない」 そんなひとりよがりやで、押し付けがましい心情でいました。それが甘えでしかないことに気づくまでに、いったいどれだけの時間を要したことか。 私の感情の垣根に巻き込んでしまったDちゃんには、本当に申し訳ないことをしてしまったと思います。 ひとりで帰らなければならぬときには、 「また襲われてもいいの？ 心配じゃないの？」 と、脅すようなことを言ってまで迎えに来させたり。 そんな私に疲れた彼が、別れ話を切り出せば、 「逃げる気？ ずっとそばにいてくれるって言ったじゃない」と、なじったり。 やがて私の罵倒に疲れた彼の口からも、 「お前みたいな女と付き合ってやってるんだよ」 ——なんて言葉が出てしまう。 そして彼とは、翌2001年の5月に再び別れてしまうのですが、当時、彼がいなければ、私には感情をぶつける相手が、場所が、まったくなかった。感情のおもむくままに何でも口に出せたDちゃんがいなかったからこそ、あの、生きることを見失っていた日々を過ごせたのだと、今は思います。</p>	<p>[25:35～]</p> <p><u>玲奈のアパート・一室(内)(昼)</u></p> <p>健司はダンボールに荷物をまとめている。 玲奈は健司の背後に近づいてくる。 玲奈「私を置いて出ていくの？」 健司「お互いのためだよ」 玲奈「健ちゃんはまだ私が襲われてもいいの？ きっと私、同じ目に遭うよ？」 健司はふいに立ち上がると玲奈に顔を近づける。壁際まで追いつめていく。 健司「おまえさあ、その二人組だっけ。犯されているとき、本当は興奮して濡れてたんだろ？ また犯されたら、今もそう思ってるんだろ？」 玲奈「……どうしてそんなことがいえるの？」</p> <p>健司「このままおまえといると頭がおかしくなる、今までつきあってやってだけでも感謝してほしいよ」 玲奈「ごめんさい、これからは健ちゃんのいうこと何でも聞くから、ねえ別れるなんて言わないで、お願い」 健司「ほんっと無理。頼むから、おれのことは忘れて、幸せになって」</p>	<p>①「また襲われてもいいの？」(健ちゃんはまた私が襲われてもいいの？) ②「お前ホントは喜んでたんだろ。スリルがあって気持ちいいかと思ってたんだろ」(おまえさあ、その二人組だっけ、犯されているとき、本当は興奮して濡れてたんだろ？ また犯されたら、今もそう思ってるんだろ？) ③「お前みたいな汚れた女とつき合ってやってんだ。感謝しろ！」(今までつきあってやってだけでも感謝してほしいよ) ④「頼むから、もう俺のことは忘れて、幸せになってくれ。」(頼むから、おれのことは忘れて、幸せになって)</p> <p>この台詞(括弧内が本件映画での台詞)は、ほぼ同じである。これらの言葉(台詞)は、⑦原告が恋人に精神的に深く依存して、やり場のない感情を恋人にぶつけると同時にしがみついていたこと、⑧それを受け止めていた恋人が遂には疲れ果ててしまったことを表現している。</p>	<p>主人公の台詞が共通しているというが、これも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を表現したものではない。</p> <p>また⑦及び⑧も客観的な事実であり、原告の思想または感情ではないし、また、これらの「事実」をもって、原告の思想または感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。</p> <p>なお、本件各著作物では、様々なシーンにおいて原告が恋人に対して発言してしまったひどい台詞や原告に対して恋人が放った暴言が、回顧的に、悔悟の念とともに記載されているのに対し、本件映画においては、主人公と恋人との別れのシーンにおける台詞として連続的に使用されており、その描写も客観的な視点でなされており、表現方法もまた異なる。</p>

エピソードの概要	本件各著作物	本件映画	原告の主張	被告の主張
7	<p>【本件著作物1 80頁7行目ないし82頁6行目】</p> <p>二〇〇一年のお正月、私は改めて母に、本当は逃げ切れなかった事実を話した。毎年、お正月には父が都内の神社で、演奏会を行う。それを家族で聴きに行くのが恒例だった。神社の境内で、甘酒を飲みながら父を待っているときのことだった。「なんでいまさらそんなこと言うのよ!? あんたの言うこと信じられない!」母は私に怒りをぶつけてきた。私を心配するどころか、驚くような勢いで怒った。その日は、それ以上何も話さずに帰った。ショックだった。私は、事実を話さないでいることに、罪悪感や悔しさを感していた。その結果、母にこそ事実を伝える決断をしたが、間違っていたのか。もしかしら、母はショックをうまく表現できていなかったのかもしれないが、そのときの私がそこまで気を回す必要もないと思った。私は、最近まで、このときのことと親と衝突してきた。</p> <p>「親ならもっと心配するんじゃないの?」「だったら最初から本当のこと言えばいいじゃないの! 親の気も知らないで!」「言えなかったんだよ……」「だから信じらんないって言ってんのよ!」</p> <p>この繰り返し。きっと、母は私以上に事実を受け止められずにいたのかもしれない、と思うようになった。だから必死に、私の言葉を信じようとして、憎まれ口も、安心させようとして隠したことも、そのまま受け止めてしまう。『なぜ当事者の私のことを一番考えてくれない? “辛かったね”ってたった一度でも抱きしめてくれたらどんなに安心したか……』私が求めているのはそんなことだった。それをそのまま母に伝えたこともある。しかし私の母は、それができない。それは、きっと、母にとっては、母が「娘を傷つけたら当事者だから……。』『でもね、事件の当事者は私なんだ……』母は、それを見失うほどのショックを受けていたのかもしれない。</p> <p>【本件著作物1 83頁7ないし10行目】 「お前は強い子だから、そんなこと(事件のこと)を気にするような子じゃなくてしょ」「お前はいつまでそんなこと言うてるんだ。そうやって親を責めてるつもりか!」「またそんなことを引き合いに出して脅かしてるつもりか?」</p> <p>【本件著作物1 84頁2ないし4行目】 「あんたが襲われたのはあんたのせいではないけど、私たちのせいでもないんだから、そんなことで私たちを責めないでよね!」これは母の言葉である。</p> <p>【本件著作物2 30頁1ないし9行目】</p> <p>年が明けて〇1年のお正月、私はあらためて母に本当のことを話しました。やはり、母にだけでも知っておいてもらいたい、事実をきちんと話しておかなければならないと思ったからです。すると母は、怒りをあらわにしてこう言いました。「なんで今さらそんなこと言うの? あんたの言うこと、信じられない!」ショックでした。当時の私は、 “被害にあったのは私だよ。なぜ、なくさめてくれないの? 「かわいそうに」と言って抱きしめてくれないの?” そんな思いでいっぱいでした。</p>	<p>[27:41~]</p> <p>玲奈「お母さん、大切な話があるの、聞いてくれる?」</p> <p><u>玲奈の実家・二階・廊下(午後)</u> 昼食の食器をのせた盆が廊下のドアの前に無造作に置かれている。ご飯とおかずの一部が食べ残されている。 和代(声)「なんですって?」 ドアが小さく開く。 ドアの向こうの影(雅彦)がじっと階下に耳を澄ましている。</p> <p><u>玲奈の実家・一階・台所(内)(午後)</u> 和代は興奮して唇をぶるぶる震わせている。 和代「どうして今頃になってそんなことを打ち明けるの? お母さん、あなたの神経が信じられない!」 玲奈「だって……」 和代「そんなことがご近所に知られたら、どうするのよ? 恥ずかしい!」 玲奈「強姦されるって恥ずかしいことなの? 私は被害者なんだよ?」</p> <p><u>玲奈の実家・一階・居間(内)(夜)</u> 恵三は腕組みして、じっと目を閉じている。和代は恵三の隣に座っている。 玲奈「テーブルをはさんで両親と向かいあって立っている。 恵三「(あっさり)忘れたほうがいいね」 玲奈「……は?」 恵三「おまえは強い子だから、そんなことは気にせず今までどおり、生きていけるはずだ」 玲奈「(耳を疑って)今なんていったの?」</p> <p>恵三「野良犬に手を噛まれただけだろう、ささと忘れるんだ」 玲奈「忘れられるわけじゃないでしょ? ねえわかってるの? 私、強姦されたの、見ず知らずの男たちに! それを、ぜんぶ、なかったことにしろっていうの? あんたたち頭おかしいんじゃないの!」 玲奈が部屋を出て行くこととする。 恵三が立ち上がった玲奈をつかまえ平手打ちにする。 玲奈「頬を手でおさえて……」 恵三「親に向かって……、何だその口のききかたは!」 和代「(涙声になって)あんたが襲われたのは、私たちのせいだって言うの? そんなの筋違いだわ!」 玲奈「私は……」 玲奈が部屋を出ていく。</p> <p><u>玲奈の実家・二階・廊下(夜)</u> 玲奈は閉じられたドアの前に立っている。 (中略) 玲奈「(涙あふれて)お母さんが抱きしめてくれたら救われる気がして、それだけで……」</p>	<p>①主人公が意を決して、暴行被害に遭ったことを母親に告白したこと ②それに対して母親が主人公をやさしくいたわるところか逆に主人公に怒ったこと ③その後も両親は主人公を気遣うどころか厳しい言葉を投げ、それに対して主人公が失望と怒りをぶつけたこと ④母親にやさしく抱きしめてもらいたかったが、その願いが叶わなかったことが共通している。また、その際の、 ⑤「なんでいまさらそんなこと言うのよ! ? あんたの言うこと信じられない! !」(どうして今頃になってそんなことを打ち明けるの? お母さん、あなたの神経が信じられない! !) ⑥「お前は強い子だから、そんなこと(事件のこと)を気にするような子じゃなくてしょ」(お前は強い子だから、そんなことは気にせず今までどおり生きていけるはずだ) ⑦「あんたが襲われたのはあんたのせいではないけど、私たちのせいでもないんだから、そんなことで私たちを責めないでよね!」(あんたが襲われたのは、私たちのせいだって言うの? そんなの筋違いだわ!)との台詞(括弧内は、本件映画の台詞)は、ほぼ同じである。 ⑧両親が事件をなかったかのようにしようとしていたこと、⑨原告は優しくいたわってもらいたかったが両親は原告に対して優しさを示せなかったこと、⑩両親に対する原告の失望と悲しみ、⑪性犯罪被害は隠すのが当たり前という原告が打破したい社会の風潮を表現している。</p>	<p>①ないし④は、何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を表現したものではない。 ⑦、⑧及び⑨は「事実」であって思想または感情ではないし、上記①ないし④の「事実」自体をもって、原告の思想または感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。 なお、事件のことを聞かされた両親の反応について、本件各著作物では、対立する当事者である原告の視点で、原告の内心を中心に記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の視点で、客観的にその状況が描写されているのであって、表現方法もまた異なる。</p>
8	<p>【本件著作物1 108頁2ないし最終行】</p> <p>その後、後の夫となる男性とつき合うようになった。とても淡々とした人だった。誰かと向き合おうとするたびに、私は、事件のことを話すべきか考える。彼が部屋に泊まる。 「ちょっとトイレ行ってくるね」 やっぱり吐いてしまう。 怖くない、事件とは違う、と自分に言い聞かせてもだめなのだ。でも、私はもう驚かなくなっていた。そうなのだから仕方ないと、諦めていた。何度も何度も、我慢した。彼には、気分が悪くなっていることは告げられなかった。</p> <p>【本件著作物1 115頁6行目ないし117頁7行目】</p> <p>その半面、彼との生活で、何度吐き気をもよおしたとか。私がセックスに対して人よりも恐怖心が強いこと、敏感であることは話していた。事件のことも話した。話せば分かってくれると思っていたから。車の中ではイヤだということ、玩具などの身体以外のものを入れられるのは怖いこと、真っ暗で大音量の曲が流れている環境もダメなこと、生理中は絶対にできないこと…… こんなことになったら、間違いなく私は震え始め、涙が出てきて、吐いてしまう。</p> <p>乱暴に扱われ、怯えると、「どうしたの?」と聞かれ、何が怖いと感じたのか説明することもあった。そのときは、困った顔をしながらも「ごめん」と謝ってくれる。しかし、 『シラケさせた……?』 ——私はそう思う。 「ぶち壊してごめんね」と私が謝っても、「いいよ」と答えるほかないだろうから、その言葉も信用できない。実際、彼は私を責めなかった。でも、彼は、数日後には私が「怖い」と訴えたことを忘れてしまう。セックスが始まればまた、口を押さえられたり、玩具を使われたり……。吐き気がする。彼には、セックスが「怖い」など、想像もつかないことのように。 『毎回説明しないといけないの?』 忘れていいのか軽視しているのかは分からないが、私の訴えは、意味のないことのように思える。 「話したはずなのに……」 と、憤る。 そんなときは、怖いという気持ちを出さないように、別のことを考えて気を紛らわすしかなかった。それがどんなに屈辱で、なぜ相手に伝えられないかは、男性には到底理解できないことなのかもしれない。 『早く終われ!』 ……あのときと同じだ……。</p>	<p>[38:18~]</p> <p><u>菊池のマンション・寝室(内)(夜)</u> 鏡台の前に座った玲奈が意を決したように鏡の中の自分を見てから鏡台の明かりを消して立ち上がる。 ベッドの上で下着姿で横になっている菊池が玲奈を見る。玲奈が服を脱ぐ。 菊池「やっぱり……やめとこ」 玲奈「いいの。お願い」 玲奈がベッドに横になる。 菊池「大丈夫?」 玲奈「……(うなずく)」 菊池が玲奈にゆくりキスをする。 菊池が玲奈を愛撫する間、玲奈は唇を噛みしめて声を押し殺している。</p> <p>阿部(声)「もういいや」「いいや、こいつで」</p> <p><u>玲奈の回想・ワゴン(車内)</u> 玲奈に覆いかぶさった阿部が声を上げながら突いてくる。</p> <p><u>菊池のマンション・寝室(内)(夜)</u> 玲奈は思わず菊池を突き飛ばす。 玲奈「怖いよ」 菊池「……ごめん、つい夢中になって」 × × × 菊池は裸のまま熟睡している。 玲奈は、洗面台に嘔吐する。胃が痙攣して苦痛に顔をゆがめる。 玲奈「(つぶや)幸せになってやる……私だって、幸せに……」</p>	<p>①事件のせいでもセックスに対して拒否反応が起きるようになったこと ②(後の)夫とのセックスでも必死に我慢するもの恐怖と苦痛が付きまとい、吐き気をもよおしていたことが共通している。 この事実は、⑦普通の男女の関係を築きたいという原告の願いと、⑧それを阻むように起きる拒否反応に対する悔しさや原告の心の傷の深さを表現している。</p>	<p>①及び②は何れも客観的な「事実」であって、原告の思想または感情を「表現」したものではない。 ①及び②の客観的「事実」自体をもって、⑦ないし⑧の原告の思想や感情を創作的に「表現」したものと考えることはできない。 なお、事件によって性的なことに対して拒否反応が起きるようになり、後に結婚した男性とのセックスも苦痛だったという状況について、本件各著作物においては、原告の視点で、原告の内心とともに記載されているのに対し、本件映画においては、第三者の視点で、客観的にその状況が描写されているのであって、表現方法もまた異なる。</p>

なお、「本件映画」欄の記載は甲第4号証をベースとして、同号証が本件映画と一致していない部分を原告代理人が本件映画に合わせて変更したもので、時間は当該エピソードの開始時点における甲3の経過時間の表示。